

国有林野 事業の取組

平成二二年度

国有林野事業業務研究発表会

国有林野事業における技術開発や森林環境教育の推進等の成果が報告される発表会。
今年度からは、地域との連携や森林管理署等の創意工夫による
国民視点に立った取組を発表する「国民の森林部門」を新たに設けました。



中部森林管理局南信森林管理署、信州大学農学部との共同発表



質疑応答



発表会場の様子

林野

野庁では、森林管理署等における現場業務の実行を通じて得られた技術開発等の取組成果を報告するとともに、広く普及することを目的に毎年国有林野事業業務研究発表会を開催しています。

本年度は、一二月一〇日、従来からの森林技術部門、森林ふれあい部門に加え、新たに森林管理署等の創意工夫による国民視点に立った取組を発表する「国民の森林部門」を設け、三部門、計二九課題について発表が行われました。

課題の中には、森林管理署等が地域の学校、民間企業、NPO団体等と共同で取り組んだものもあり、外部との連携にも広がりが見られます。

森林技術部門では、公益的機能の高度発揮を目指した森林施業技術や、低コスト・効率的な作業システムの実現、労働安全対策等に関する取組を発表しました。

策等に関する一三課題が、森林ふれあい部門では、森林環境教育等に関する九課題が発表されました。

また、新設された国民の森林部門では、地域と連携した森林づくりや普及活動など七課題が発表されました。

発表直後の質疑時間には、審査委員だけでなく会場からも多くの質問が出され、発表者からは取り組み上で苦労した点やニーズの把握方法など、興味深い話も披露されました。

ここでは、林野庁長官賞（最優秀賞、優秀賞）を受賞した発表課題を紹介します。

今回発表された全課題の概要は研究発表集としてとりまとめ、現場業務の一層の効率化、民有林への普及、森林環境教育の充実等を図るべく、全国の森林管理署や都道府県等に広く紹介していく予定です。

最優秀賞

「二〇〇年先を見通した森林づくり」を指して—造林地内に生育しているヒバの利 用方法の検討について—

東北森林管理局 由利森林管理署 高橋 友和
三陸中部森林管理署 尾上 好男



青森県には、

スギ造林地において造林木に混ざってヒバが旺盛に天然更新している箇所があり、このようなヒバを生かし、次世代のヒバ資源の土台を築くことが重要と考えています。そこで、ヒバの更新時期や樹高成長パターンなどの生育歴に着目した調査を実施し、その有効的な施業方法について考察しました。

スギ造林地において造林木に混ざってヒバが旺盛に天然更新している箇所があり、このようなヒバを生かし、次世代のヒバ資源の土台を築くことが重要と考えています。そこで、ヒバの更新時期や樹高成長パターンなどの生育歴に着目した調査を実施し、その有効的な施業方法について考察しました。

このことから、現在、造林地に生育しているヒバの取扱い方については、初期成長まで造林木とともに成長させ、それ以降は両種の競合を緩和させるような本数調整を行っていることで、ヒバと造林木の混交林へ誘導し、今後はヒバ稚幼樹を生かした施業方法の確立を検討することが望ましいと考えるところであります。

このことから、現在、造林地に生育しているヒバの取扱い方については、初期成長まで造林木とともに成長させ、それ以降は両種の競合を緩和させるような本数調整を行っていることで、ヒバと造林木の混交林へ誘導し、今後はヒバ稚幼樹を生かした施業方法の確立を検討することが望ましいと考えるところであります。

生育木の位置関係、樹高の成長パターンについて調査した結果、スギの造林地内に生育しているヒバの特徴として、①スギの植付時に既に稚幼樹として生育していたこと、②初期成長（樹高四割程度まで）が造林木に劣らず良好であること、③初期成長以降は造林木との競合関係に影響されていることが明らかとなりま



皆伐跡地に生育しているヒバ稚幼樹

①天然更新を促す地表かき起こしでは、笹の地下茎の除去に留意する。
②間引きする列の幅は二二三程度



間引き直後の天然更新カラマツ

りつつ、除伐等その他の保育の必要性を検討していく考えです。

優秀賞

「天然下種更新による複層林造成について」

北海道森林管理局 十勝東部森林管理署 三間 武
川越 敏充
佐久間正巳



近年、カラマツ材については、構造用合板やラミナとしての需要が高まっていますが、これまでは、需要を確保し、中央を機械道として、その左右にそれぞれ五〜六割の更新面を設置する。

③稚樹のムレ防止と競合草本除去のための下刈は、刈払の高さを二〇センチとし、期間はカラマツ発生苗が草本類との競合状態を脱する二〜三年間とします。

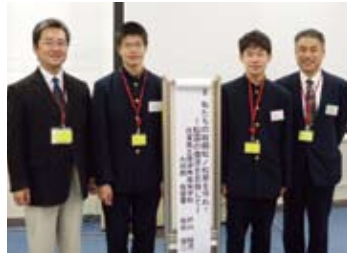
また、種子の豊作年は地表かき起こしの時期を選ばないため作業時期の選択枝が広がると考えています。今後は、更なる複層林造成の省力化を目指し、間引き方法を工夫するとともに、下層木の成長の推移を見守りつつ、

最優秀賞

「私たちの故郷虹ノ松原を守れ！」
——「松露の復活を目指して」——

九州森林管理局 佐賀森林管理署
佐賀県立唐津南高等学校 食品流通科

和田 誠二
戸川 龍児
水野 雄太



私たちの故郷には特別名勝に指定されている「虹ノ松原」がありますが、広葉樹の侵入

ロマツの植樹に取り組んでいます。これらの活動には膨大な労力を要することから、今後とも唐津市民等の幅広い協力が重要と考えており、地元の小学生等とも連携するなど、この活動を通して市民参加型の松原保全活動のモデルを示していきたいと考えています。

により、危機的な状況に置かれています。これは従来行われてきた松葉掻きが行われなくなり、土壌が富栄養化したことが原因と考えられています。

このような中、健全な松原の状態を取り戻し、「白砂青松」の松原を再現していくため、佐賀森林管理署と唐津南高等学校は「遊々の森」を締結し、虹ノ松原内の松葉掻きや繁茂した広葉樹や雑草の除去を行うとともに、クロマツ林の健全度を示すバロメーターと言われるキノコ「松露」の復活を目指した松露菌感染ク



地元小学生と松葉掻きボランティアで交流

優秀賞

「遊々の森・森林学習活動の取組」
——『たいようの森』の活動をとおして——

近畿中国森林管理局 広島北部森林管理署 榎原 佳子



「遊々の森」制度の発足から六年を経過する中、今後の活動を更に推進するための一定の方策を

今回のマニュアル作成により、どのような取組の実施が可能であるかや、活動の推進に有効であるかを具体的に示すことができました。今後は、マニュアルの活用を進めるとともに、さらに工夫を重ねた活動が継続的に展開されるようマニュアルの充実に取り組むたいと考えています。

とりまとめおく必要性を感じました。このため、活動実施者等の自主的な活動が軌道にのるまでの取組を支援し、スムーズな活動実施に役立つことを目的としたマニュアルの作成を試みました。

これまでの活動事例の分析やアンケート調査の結果から現在の状況の把握を行い、問題点等を分析し、①年間計画のパターン化、②手続き等の省力化、③地元NPO団体等との協力関係の保持、④挿し木・チューブ苗（灌水チューブを利用した苗）の試み等の取組を実施するとともに、これらの結果をマニュアルの作成に反映させました。



活動推進マニュアル (表紙、内容)

最優秀賞

「地域のニーズを引き出す取組」——「郷学官」共同企画を通じた森林林業の普及——

中部森林管理局 南信森林管理署 井元 幸子
信州大学 農学部 高田乃倫予
藤田 ゆう



南信森林管理署伊那森林事務所管内の国有林と隣接し下流域に集落（手良地区）が位置して

いますが、これまで特に地域との密接な交流はありませんでした。このことは地域に森林・林業の重要性を普及していく上で課題であると考えられることから、郷学官（集落と大学生と国の三者）の交流を活発にする取組を行いました。

伊那森林事務所の森林官がコーディネーター役に立ち、手良地区が計画しているハイキングに森林ガイド（大学生と森林官）が同行するという企画を大学・地区のそれぞれに持ちかけ、共同で取り組むきっかけにしました。また、企画にあたっては、国民視点に立ち、地域のニ

ズを引き出すよう心がけました。

この企画の実施は、地区から「是非来年も参加してほしい」と要望を受ける好評価を得たところであり、その土地ならではの条件を活かして、「郷学官」の交流を活発に行う手法として非常に有効なものとなりました。本取組は、ガイドの実行のみならず、その過程を通じて森林・林業の重要性を地域に普及していく上で大いに役立つ結果となったと考えており、今後も「郷学官」の交流として推進していく考えです。



大学生による森林ガイド

現地ではシカの食性や行動を観察した結果、自然に生えた草木が多くなればその新芽を好んで食べることから、造林木への食害は発生しないことが分かりました。また、当署で台風被害対策として試験的に実施していた三本巢植造林地では、シカの食害を免れ、下刈の回数も減らすことができました。このことから、スギ

③一年目の下刈は行わず、二年目は膝下の高さで刈り払い、シカの好む新芽を多く発生させます。三年目以降は、被圧されるようであれば刈り払います。今後、この手法について民有林にも広く普及を図っていく考えです。



下刈をやめたことで自然草木が生長した試験地（5年生）

優秀賞

「自然の草木を利用してシカの食害から森林を守る保育方法の取組について」

九州森林管理局 大分森林管理署 廣田 光春
武原 龍行



大分森林管理署管内の新植地においては、民有林・国有林を問わずシカによる造林木への食害が発生して

います。その対策にはシカネットなどによる保護が必要となり、負担が発生するため、個人林家では植林に対する意欲が低下している状況となっています。このようなことから、シカネットなどに頼らない保育方法を検討してきました。

造林木をシカの食害から守る方法として以下のような方法が有効であると考えました。

①伐採後は、草木が侵入するまでそのままの状態においてから植え付けます。その際、造林地の周囲二三メートルをシカの侵入防止帯とするため、地拵・植付を行いません。

②地拵では、造林地内の草木を極力残し、刈り払う際は膝の高さで行います。植林は草木の間に植え付けます。（三本巢植えの方が効果は大きい）